

# Re：ゼロから始めるシカ捕獲 ～シカ捕獲に取り組んでみて判ったこと～

塩那森林管理署 岩崎 諭  
近江 隆昭

## 1 きっかけ

当署管内、栃木県那須塩原市、矢板市、塩谷町ではシカが多数生息し、苗木の食害などが発生しています。このため、平成29年度から委託事業によりシカ捕獲を行っています。近年は春から夏の時期と秋の時期に2回実施していましたが、令和3年度の秋については諸般の事情により実施できませんでした。

そんな折、実施場所となるハンターマウンテン塩原（以後「ハンタマ」）ゲレンデでおびたしい数のシカが撮影された写真を見つけました。現地は、誰が見てもわかるくらいシカの通り道が残されている、極めて平坦地で作業がしやすい、車の走行が可能で車中から安全に見回りを行うことが出来る等、経験のない職員がわなによるシカ捕獲を行うにはこの上ない条件がそろっていました。

また、後述するような協力を得られたことから、わな研修修了者の捕獲技術向上もかねて署内の有志によりシカ捕獲に取り組むことにしました。

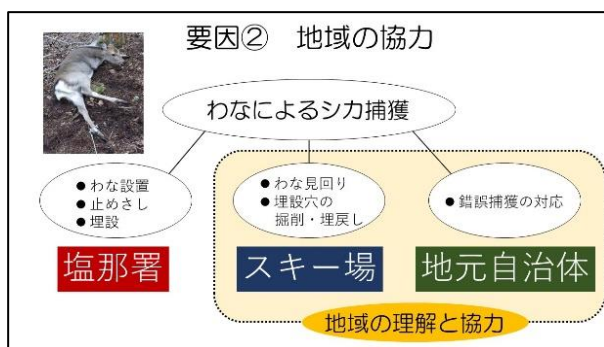
## 2 実施にあたって

捕獲を実施できた大きな要因の一つとして、地域との協力体制を構築できたことです。残置森林の食害などで困っていたハンタマが一番の労力となる毎日の見回りを行ってくれることになりました。加えて重機での埋設穴の掘削、埋め戻しも行ってもらえることになりました。

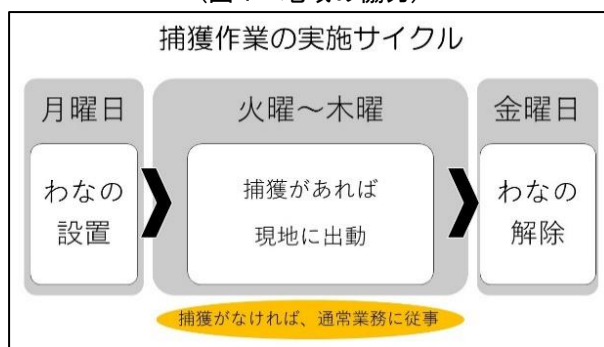
捕獲許可の相談に出向いた市役所支所からは、ツキノワグマやカモシカの錯誤捕獲や鉄砲が必要な場合については、市の鳥獣被害対策実施隊で対応してもらえることになりました（図1）。

わなは月曜に設置、金曜日に解除することとし、火曜～木曜は捕獲があれば職員が出向いて処理を行いました（図2）。

くくりわなはオリモ製作販売株式会社のOM-30を使用、保定にあたっては株式会社三生の各種保定具、止め刺しは自作した電気ショッカーと刃物を使用しました。車両は軽トラック1台搭乗員2名を標準とし、経験者を必ず1名以上入れることとしました。



(図1 地域の協力)



(図2 実施サイクル)

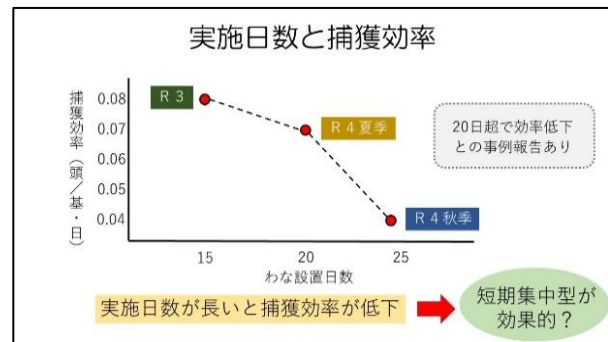
## 3 実施結果

令和3年度は10月18日から11月5日までの15日間実施し12頭（オス2、メス10）を捕獲、令和4年度は夏季（6月27日から7月29日まで）に20日間実施し16頭（オス3、メス・幼獣13）、秋季（10月10日から11月11日まで）に24日間実施し14頭（メス14）でした（図3）。

実施日数が長くなると捕獲効率が低下する傾向が見られました。20日以上継続すると捕獲効率が落ちてくるとの事例報告もあり、それを裏付ける結果になりました（図4）。

捕獲の実施結果	
令和3年度	わな設置日数 15日 捕獲頭数 12頭 (オス2、メス10) 捕獲効率 0.08頭/基・日
令和4年度	わな設置日数 20日 【夏季】捕獲頭数 16頭 (オス3、メス・幼獣13) 捕獲効率 0.07頭/基・日
	わな設置日数 24日 【秋季】捕獲頭数 14頭 (すべてメス) 捕獲効率 0.04頭/基・日

(図3 実施結果)



(図4 日数と効率との関係)

#### 4 判ったこと

(1)外部の協力が不可欠

##### ア 見回りについて

くくりわなは、1日1回は見回りを行うこととされています。本取組ではハンタマが見回りを行ってくれましたが、捕獲がなくても見回りは必要ですので、仮に職員が全て行くと追加で162時間の従事が必要となります（図5）。また、捕獲のなかった日が12日間ありましたので、72時間は現場に行行って帰るだけとなるどころでした。

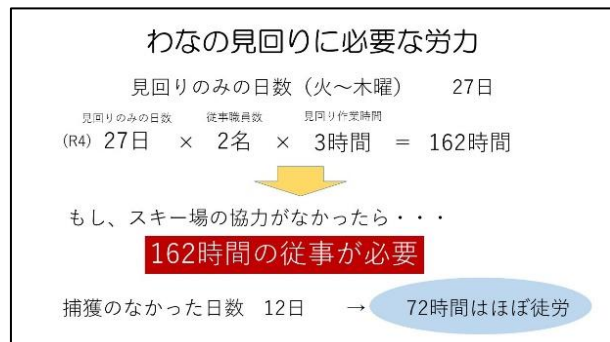
##### イ 埋設について

捕獲した個体は、1頭ずつ穴を掘るのではなく重機で大きな穴を掘って埋める「集合埋設」としました。仮に1頭ずつ穴を掘るのを職員が行うと、追加で48時間の作業が発生していました（図6）。

##### ウ 錯誤捕獲等について

これまで錯誤捕獲や鉄砲の必要な事態は発生しませんでしたでしたが、ツキノワグマがかかったとすると、専門業者への依頼事務（見積聴取→予算確保→決裁事務）で約3日、経費が約20万円発生します（図7）。

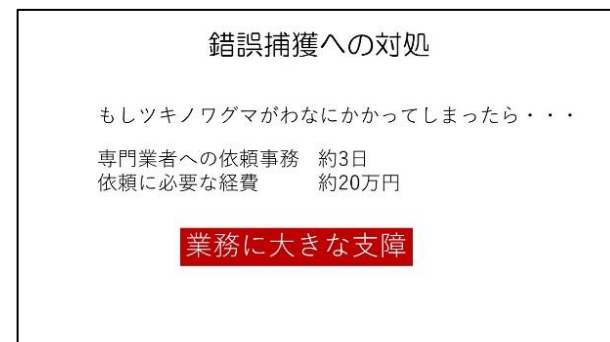
仮に事案が発生した場合、那須塩原市の鳥獣被害対策実施隊に依頼して止め刺しなどしてもらい、埋設等は職員で行う流れを、市役所支所と事前に確認していました。



(図5 見回りの必要量)



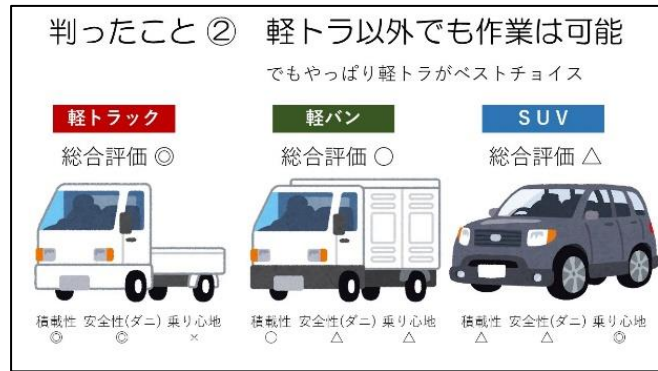
(図6 埋設の必要量)



(図7 錯誤捕獲への対処)

## (2) 車両の選択

優れた積載性や悪路走破性、小回りが利くことなどから狩猟の必須アイテムのような軽トラックですが、本取り組みの間には、他業務との兼ね合いで使えない日もあり、軽バンやSUVで作業することもありました。積載性では軽トラックに及ばないものの、作業は可能であり、移動時の疲労軽減といった利点も確認できました。



(図8 車両の選択)

## 5 担当者の感想

### (1) よかったこと

まず、2年間取り組んだ中で、当初の目的であった職員の捕獲技術は確実に向上しました。1年目は担当者が毎回出動していましたが、2年目は他の方に任せることができました。しかし、参加できなかった方や、人事異動もあるので、技術力の定着・向上のため、捕獲を継続することが重要と考えています。

次に、地域との連携を創出できたことが挙げられます。打合せのため事務所に向いたり、電話やメールを通じてやりとりを続けていく中で、相互の垣根を越えて協力しあえる関係を築くことができました。特にハンタマでは、これまでシカによる被害をただ見過ごすだけでしたが、来年も捕獲をぜひ続けたいという話が出るほど意識が変わったことは大きな収穫だったと思います。

### (2) 悩んだこと

最も悩んだことは、人手の確保についてです。「2 実施にあたって」で述べたとおり、出動に際しては連絡を受けてからの人選となりますが、他の業務のため出動できる職員が不足し、時間をずらすなど必要人数を確保するのに苦労しました。参加者からはシフト制にしてはどうかという案も出ました。

わな研修の受講者であっても「私そういうのはちょっと…」「血を見るのはダメで…」といったように、皆が捕獲に積極的とは限らないため、個人の思想信条に配慮することも重要と判りました。

次に、他の業務との両立は非常に困難ということです。主となる森林育成担当は造林事業や他の保護事業も担当しているため、捕獲の有無によってその日の業務が変わってきます。忙しさの予測ができないのは大変でした。

また、職員は基本的に初心者ばかりなので、わなの設置場所や道具の取扱いなど現場での技術習得と習熟に時間が必要です。

以上のことから、職員だけによるシカ捕獲は、労力的・予算的な難しさがあり、専門に担当する職員の配置を要するなど、現実的でないことが判りました。しかし、本取り組みのように地域の方の協力で負担を軽減し、緊密な関係を構築でき、職員の捕獲技術向上ができたことは、大きな成果とらえています。